The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 山路勝彦『台湾タイヤル族の100年ー漂流する伝統、蛇行する近代、脱植民地化への道のり』
Author(s)	中村, 平
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 165-173
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評：山路勝彦『台湾タイヤル族の100年―漂流する伝統、蛇行する近代、脱植民地化への道のり』

中　村　　平

1

本書は風響社より2011年３月に出版された。まず各章の初出年を含め、章構成を紹介する。５章からなる第一部は「ガガと贖罪―タイヤル族慣習法の世界」とされ、1982年から87年の論考を収録する。第二部「植民地経験の民族誌」と第三部「脱植民地化への道―現代を生きる」は５章（プラス附）構成で、2005年から10年の論考と書き下ろしを含む。本書は副題に「近代」と「伝統」、「脱植民地化」というキーワードを掲げ、それらを軸にタイヤルの百年を問い直そうとする民族誌である。ただし著者自身、まえがきで「人類学の民族誌というよりも、実際は日本近代に関わるタイヤル社会史」という分野に収まると述べている（12頁、以下「著者」は山路氏を指す）。社会史そして更には歴史学に民族誌を位置づけており、本書のこうした設定は必然的に台湾先住民族史と日本史、台湾史といった大きな範囲に及ぶことになる。

近年、「脱植民地化」が人文諸学において脚光を浴びているが、副題に掲げられたこの重要な概念について著者の明確な規定は見当たらず、索引にも「脱植民地化」はない。なお本稿では、引用ではない地の文ではコロニアリズムを「植民主義」、decolonizationを「脱植民化」と表記する（中村平 2009を参照）。第７章では人類学の「方法論の精緻化」が近年なされたとしているが（225頁）、そのことと本書での「脱植民地化」概念の設定の関係は明示されておらず、読者は本書全体を通して脱植民化とは何かを創造的に読み込まざるをえない。そのため、本稿では著者自身が副題に掲げたこの重要な概念を軸に、書評を展開したい。タイヤルに対する植民地化について1970年代からフィールドワークを通じて思考し、日本の台湾先住民族研究を引っ張ってきた著者であるなら、脱植民化についての一定の概念規定を求めることは読者として過分な期待とは言えないであろう。この点は私見では、先住民族知識人が提出し苦悩する脱植民化（中国語の「去殖民」）概念の分析が必要だと考える（中村平 2009）。

著者は、台湾先住民族と関わり『近代日本の植民地博覧会』（2008年）、『台湾の植民地統治』（2004年）などの著作を精力的に上梓してきた。2004年の著作は「本書では、植民

地官吏の仕事ぶりについて詳しく触れ、「無主の野蛮人」論を推進してきた張本人である一方で、山地での「生活改善」に邁進した彼らの実務能力の高さに目を向けてきた。いわば「文明の実験」を試みていたと考えたからで、時代のもたらした限界は否定できないにせよ、この実務の堅実さは正当に位置づけたいと思う」（323頁）とし、2011年の『台湾タイヤル族の100年』においてもこのトーンは踏襲される。このように記述される時、「旧慣時代」のタイヤルの主体性や、日本が暴力的に進める「近代化」に対する複雑な思いや反発は基本的に捨象されてしまう。

植民地化について、抑圧や暴力的事態はあったものの世界史的な近代化進行の流れからすれば不可避の過程であったとする史観を一般に近代化論と言うが、著者の上のような叙述は近代化論的なトーンを持つと言える。この観点からすると、「一生のうちに何度も異民族統治を受けた人々の心は屈折している」（307頁）とする見解や、1970、80年代初頭の「タイヤル族自身の自虐的雰囲気」（８頁）という（具体的なコンテクストが読者にあまり提供されない）記述も、驚くには当たらない。「日本が持ち込んだ」進歩や発展という概念に基づいた、「日本は発展した国であって、タイヤルは遅れた民族」という考えをフィールドワークで著者が聞き書きしたというが、それを「自己卑下の感情」（412頁）とすぐに解釈してしまうのではなく、著者自身のいう「語りの政治性」（後述）や、日本人に対してタイヤルの人々が（おそらく日本語で）語るその意味の丹念な分析が必要とされている。他者の表象にかかわる問題だけに筆の運びには細心の注意が要求されるし、著者のフィールドワーク体験を1980年前後の時代の雰囲気とつなぐには、もう一歩の実証的手続きが必要とされていないだろうか。「旧慣」を立ち上げる文化本質主義的記述（後述）を超える、植民地化に関わるタイヤルの歴史経験の分析と記述が一貫して希薄であることが、こうした叙述から理解される（歴史経験概念については冨山 2010を参照）。

植民主義とは何かという世界史的広がりを持つ困難な課題は、後述のように山路（2002）において断片的整理があるが、自らの研究対象として明確に捉えられていないためであろうか、本書の基本視角に生かされない。日本植民主義については、台湾先住民族について「無主」であるがゆえに「統治者」としての「日本が君臨すべき」というイデオロギーとするのみで（215頁）、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（1996年）などが提起する文化的ヘゲモニーの分析が手薄になっている。山路書のまえがきの注に述べられる坂野徹（2005）との認識のずれは、この統治の文化的ヘゲモニーに関わるものであり、伊能嘉矩以来の広義の人類学的分類の知の植民（主義）性を批判した陳（1998、2009）などと共に、もう一度確認されるべき点であろう（冨山 2002も参照）。駒込（2005）は、植民地支配の暴力的なリアリティとレイシズムについての重要性を喚起しているが、山路書の記述は、この暴力のリアリティとレイシズムの問題を打ち消すものとなっていると言える。また付

記すれば、タイヤルを中心に台湾先住民族に対する「理蕃」史を先住民族自身の歴史と接合しながら脱植民化を記述する、中村勝（2003、2006、2009）の成果は無視されている。「タイヤル族の100年」を「脱植民地化への道のり」として思考する者にとり、あるいは本質主義的文化の記述を超えた「社会史」に関心を持つ者にとり、以上の点についてのなんらかの見解なしには、記述がなしえないのではないか。

本書のために書き下ろされた、植民主義に関連する第六章「植民地主義の誕生――明治７年の台湾出兵事件」を見よう。ここでは本書のサブタイトルである重要な概念である「脱植民地化」と関わり、植民主義概念を「無主の野蛮人」観と「野蛮人の文明化」論を軸として設定するのみで（ex. 215頁）、「皇民化」（天皇制の問題）や「労役」、賃労働者化の問題を後景に退かせ、植民主義の暴力と差別の問題系に踏み込みにくい設定になっている。日本に連れて行かれた先住民オタイの「挿話」は明確な結論が抜かれているために、「野蛮人の文明化」の好例と読まれかねない効果を逆に生み出している。台湾出兵は「軍事的に成功しなかった」（221頁）、「日本が推進した「文明化」が功を奏した」（222頁）というような記述は、例えそれが「だが」以下の文の留保を付けられたとしても、副題で言う「脱植民地化」に照らし合わせて、いかなる意味を持つのか不明とせざるを得ない。前掲中村書『捕囚』（2009年）は、丸山眞男が近代日本の「抑圧の移譲」の発条を見た台湾出兵事件について、この時に日本軍が軍営に物売りに来たパイワンとおぼしき双子の少女を惨殺していることを、思想的背景を含めて既に分析していた。中村は、この民間人虐殺事件を日本の植民主義的認識と植民行為の端緒のひとつとしており、台湾出兵事件についてはこうした視角からの分析も必要とされよう。

2

タイヤルを中心とした台湾先住民族の、植民地下の生と主体性を決定付けた一つの施策に、隘勇線がある。山路書における隘勇線の性格付けは、統治側が発行したと思われる絵葉書のイメージ（33頁）に特色付けられたのであろうか、隘寮同士を結ぶ「交通路」（232頁）、「通路」（32頁）、「道路」（33、56、443頁）、「各部落を結ぶ道」（34頁）というものであり、先行研究である中村勝（2003、2009）の認識との著しい対比をなしている。なお、33頁の絵葉書キャプション中の「隘勇同士を結びつける道路」は「隘寮同士」の間違いである。隘勇線は中村『台湾高地先住民の歴史人類学』では「電流鉄条網を架設し、緊密に監視所を配した、山地民包囲線」（2003: 368）と性格付けられ、それは地雷敷設による犠牲と共にタイヤルの生活圏を「囲い」込んでいく、初期「理蕃」の大きな暴力的施策であった。1904年の宜蘭の隘勇線によるタイヤルへの「囲い込み」は、「宜蘭雑処の分断」と「局所化」の小節に詳しい（中村勝 2009: 第６章）。「理蕃」政策における隘勇線という

物理的「蕃地占領」は、狩猟から農耕への労働様式の転換、すなわち「先住民にとって人間の自己形成としての本質の外化の強迫」となり、自由な狩猟地が囲い込まれ収奪されていったことは、「生きた人間の現存（自己定立）に対する原収奪」となったものである（同上: 425）。この他、台湾でも隘勇線の実証的研究は進められており、隘勇線の基本的な性格は道路ではなく包囲網であることが確認される（鄭 2010、2011、林と王 2007）。

「旧慣時代」の最たる習俗であった馘首については、残念ながら山路本書ではその人類学的分析はひも解かれない。馘首について前掲中村書は、日本統治初期においてこの隘勇線の存在が、線外（総督府の統治外）の狩猟（中村書の「鹿狩り」）と線内の首狩りというトポロジー（地政的位相）を、タイヤルと日本人、そして隘勇らに意識化し、この境界線の創出がかえって首狩りを刺激したという分析がなされている（中村勝 2009: 448–54）。

第三部「脱植民地化への道」の初めを飾る第9章「部族？　民族？」は、植民地台湾人類学が発見し創出した「部族」概念が、タイヤルからの分離要求を政府に認めさせた「タロコ」の「正名」に際して実質的に復活していると読み解く。「民族」の名乗りとして自己主張を試みる姿の背後には、「部族」社会という「かつての状況が蘇ったかのようである」と述べ（394頁）、これらは植民地台湾人類学の成果を確認するような記述効果を生み出している。これが現在台湾で進行している脱植民化を正確に捉えた記述なのか、以下に見るように留保が必要である。本書とほぼ同時期に出された石垣直（2011）は、脱植民化（石垣書では「脱植民地化」）を「歴史的主体性の奪還」という言葉で言い換える（2011: 189）。「奪還」が闘争的なイメージを付与してしまうのであれば、「取り戻し」や「回復」としてもよいと考えられるが、いずれにせよ「正名」の問題は、主体性の自己決定の問題と切り離すことができないだろう（中村平 2009も参照）。「タロコ」の独立を「部族」化と見ることは、この名前と主体性の取り戻し行為である運動の本質を見誤ることにならないだろうか。

「太魯閣族正名促進会」が「正名」認定（2004年）直前の2003年に発行した『還我族名』の冒頭の「声明」は、「太魯閣族人が追求する『正名』運動は、過去に学術が主導してきたものと異なり、また文化的特徴によって決定されてきた過去の民族分類の枠組みとは異なるものである」とされていた。また、「正名」運動は「自らの主観的アイデンティティの問題」であり、「脱植民化（原文「祛殖民化」）」の「具体的表現」であるとされている（太魯閣族正名促進会 2003: 176）。山路書も引用している郭明正編『賽德克正名運動』には古川ちかしとScott Simonの論文が収録されており、それらは明確に、「正名」が脱植民化の重要なひとつであり「主体の回復」であることを説いている。山路書が「過去の植民地主義の問題」を「現在の民族認同の問題」と「重ね合わせ」て分析する（11頁）と宣言するのであれば、なおのことこの点に注意が必要であろう。またタイヤル民族議会を含め、

民族自治をめぐる動きは激変中にあって記述し難いことも確かであるが、それに対する視角の排除を正当化するものではない。

3

ところでこの主体の問題は、主体は主として語り（根本的には言語）によって構築されるというひとつの理論的視座を持つ。著者は過去に「人類学と植民地主義」をレビューする中で、先住民族のなす「語りに託している意味づけ」や「語りそのものの政治性」の重要性を述べていた（山路 2002: 15）。これはある人類学者がマオリの神話についてヨーロッパ人による創出の側面を指摘したところ、マオリ出身の人類学者に神話はマオリの本来的な語りであると再批判を受けたという文脈のもので、著者はこれを評して、「客観的な事実の論証とは別に、当事者であるマオリの構想した語りそのものの政治性」を取り上げて検討すべきであったとしていた（同上）。この点、「タロコ」の「正名」を人類学者による「部族」範疇への立ち返りであるという主張を（疑問符を付けながらも）行なった本書『タイヤル族の100年』第9章では、国家による植民地化過程と、人類学的分類（＝自己決定権の阻害）からの脱却を図ろうとする台湾先住民族の脱植民化の真の意味が見失われているように思われる。

本書では「正名」主張の背景として、1914年の「タロコ」戦争に続く1918年から本格化する集団移住あるいは「移住－集団化」の経験、1994年の「タロコ」国立公園への生存権主張（移住計画への反対）と土地返還の抗議、1996年のアジアセメント会社に対する土地返還運動などの社会運動史が押さえられていないため、「正名」における史的要因の重要性が記述から浮かび上がらない（これらに関しては、方 2009、移住集団化については中村勝 2003を参照）。因みに399頁の、1983年に台湾大学の先住民族学生らによって発刊された雑誌は『高山青』である。また著者が注意を促す「民族」概念であるが、1902年南庄事件については「民族の生存権をかけた闘争」としており（248頁）、その時点で民族意識がなかったと思われるサイシャットに対して「民族」を使用している。一方、本書冒頭では「アイヌ民族」とし、台湾先住民族は「～族」としており、脱植民化に関わりこの点は整合的に説明が求められる。

本書最終章の第10章は、日本統治時代に日本人趣味家らによって発見された「原始芸術」概念が戦後先住民に受け入れられ、市場経済の浸透と共に＜原住民工芸＞としての価値を持っていき、現在はエスニックな次元から普遍的・現代的様式へと飛躍していると説く。多くの事例が紹介され興味深いが、この先住民工芸普及の先住民ひとりひとりのアイデンティティに対する影響の具体的状況の分析に薄いため、よく見られる「芸術作品が民族のアイデンティティの確立を助ける」という以上の結論に至っていないように思われた。先

住民芸術家における、あるいはそれを身に着け、消費し、意味付与実践を行なう先住民ひとりひとりの中の、伝統と近代の葛藤やせめぎ合いがアイデンティティとの関連で分析されれば、よりリアリティのある文化動態の記述となったのではないだろうか。

4

基本的に脱植民化以前の問題として設定される「タイヤル慣習法の世界」を描いた第一部は、植民地台湾人類学の文献成果を自らのフィールドワークと絶え間なく対話させた重厚な記述であり、著者が意味づける本書の「古物掬い（サルベージ）」（５頁）人類学の第一の成果である。第１章では「旧慣時代」の泰安郷タイヤルを中心とした民俗的人間分類を概観し、第２章ではタイヤルの慣習法「ガガ」の意味論（「本源的性格」67頁）を展開し、個人の違反行為の責任を、生活を共有する者全員で受け持つとする価値観を洗練する。第二次大戦後のキリスト教の普及は「伝統的なガガの代替え」として機能を持つとし、社会変化の中での伝統の継続性を見出す（71頁）。第３章「親族儀礼と出産の穢れ」では、産婦の男キョウダイである「ヤナイ」の生まれ出た子どもに対する宗教的、呪術的、社会的関与を発見し、タイヤル親族関係の根幹をなすという結論を導き、他台湾先住民族との関連での「母方親族」研究の重要性を説く。第４章では伝統的な病気治癒の祈祷「ホムゴップ」とキリスト教の病気平癒の祈りの共通性が描かれ、外来宗教と、祖霊と神を明確に区分する儀礼を持たなかったタイヤル文化の親和性が見出されていることは興味深い。

ところでこの「旧慣時代」あるいは「慣習法の世界」の探究は、ともすれば「民族誌的現在」のスタイル（清水 1992、マーカスとフィッシャー 1989）で描かれるために、脱植民化にとり核心的問題と考えられる、植民地統治と慣習法（的世界）の関係の動態的な分析が手薄になっている。それは、著者が無意識のうちに取っている理論的枠組みである、第一部を旧慣の記述とし第二部を植民地経験の民族誌とする、この二項対立的な章構成にも関係する。この構成では、仮定された純粋な旧慣的世界（上述「本源的性格」67頁）が一気に植民地統治下で近代化されていくように読者を導いてしまう。民族誌的現在の批判以降、文化が具体的な時空において記述されなければならないことが注意されてきており、こうした視角と記述行為が、民族誌的現在が生み出してしまう本質主義的な文化記述を挫折させ続けるはずだ（挫折や「脱臼」についてはNarayan 1997も参照）。本書は無意識に、そのような注意とは反対のコロニアルな理論的枠組みを取ってしまっている。

私見では、統治側が「旧慣」を一定程度温存しながら換骨奪胎する過程が見逃せないが、紙幅の関係で省略する（中村平 2003b、中村勝 2009: 520を参照）。総じて本書には、「旧慣」と「日本化／近代化」の動態的関係（せめぎ合い）の分析が希薄である。ただし、民族誌的現在の文化記述を脱する試みは、上述した第４章の、著者の見たキリスト教の病気平癒

の祈りにおける伝統の連続性分析に垣間見られよう。この意味で、豊富なフィールドワーク資料をもつ著者に、第２章のガガの実践と、第３章の親族儀礼に関する同時代の文化実践（あるいはその衰退現象）の具体的な分析を求めたかった。常に「現場（フィールド）」から考えるという人類学的視角を踏まえれば、脱植民化の内実を明らかにすることが切に求められている現在、第一部各章の重厚な記述を「古物掬い」（５頁）という人類学者の自己肯定に終わらせず、植民化により蒙った傷や影響を乗り越える力とそれらを結びつける努力（すなわち脱植民化を遂行する記述）が必要である。

本書には植民統治の為政者と同化する表現と記述が多く見られ、ともすれば総督府のスポークスマンのように聞こえる箇所が、著者の立ち位置を読者に疑わせるものとなっている。例えば、第７章では「騒擾事件」をカッコなしで使用し（235、243頁）、太湖地方のタイヤルが隘寮を襲った事件を「痛ましい」とし（236頁）、「やっと事件は鎮圧された」という治者側の表現をする（237頁）。また「タイヤル族の馘首と漢族住民による樟脳の密造、この二つの事柄が連鎖反応を繰り返し、大きな社会問題になっていた」（240-1頁）と言うが、それらを社会問題としたのは治者側である。著者がフィールドワークを重ねたはずのタイヤル側からすれば、「社会問題」は台湾総督府側が一貫して引き起こしている。「南庄事件はこれで一件落着した」（246頁）としているが、それは治者側の認識ではないか。「治安の悪化、とりわけ馘首の猛威に遭遇し」（251頁）という表現も、引用符なしに記述される。「民族」として「成熟していなかったタイヤル社会の未成熟さ」という表現（258頁）は、なんらかの「進化」を想定している発言に聞こえる。「日本側は……［ボンボン］山を拠点にして各村落に攻勢をかけたことが勝利の秘訣であった」（258-9頁）という記述や、日本は「帰順式」という儀式を執り行うことで「植民地統治の正当性を承認させた」（260頁）という認識からは、著者の立ち位置が完全に治者側に移行したことが見て取れる。著者は、「野蛮人の文明化」を相対化しようとする本書の意図を読み込めばそのような論断は間違いであることに気づくであろうと言うかもしれないが、ここまで立場性を意識しない記述が連続すると、一文ごとの断片的なものであれ、それは副題の言う「脱植民地化」の設定の曖昧さから帰結されるものと考えざるを得ない。

この総督府側の「帰順」認識についてはタイヤルの研究者イバン・ノカン（伊凡・諾幹）からも疑問が提起され、拙稿でも総督府側とは異なるタイヤルの認識についてまとめている（中村平 2003a）。この「帰順」認識を被治者がそのまま受け取っているかどうかは、そのまま脱植民化につながる重大な問題である。桃園県復興郷でのタイヤルに対する私のフィールドワークにおいては、タイヤルは決して負けていないという発言を日本統治終了後に生まれた中年世代から聞いたこともある（同上）。また日本統治下に生まれ、現在70歳にならんとするタイヤル男性からは、2000年代前半に、日本時代を指して「あのころ

はよく日本人の話を聞いた（従った）な」という言葉を中国語で聞いたことがある。タイヤルの多くの人々は決して自己卑下などしていないし、それは先住民族運動の高まり以前においても同様ではなかったかと想像される。確かに台湾の経済成長を「底辺」労働力として支え、また仕事にあぶれ大酒を飲み、簡単に交通事故や病で亡くなり、売春従事などの過酷な側面も多々存在するが、それを「70年代、80年代初頭に見たようなタイヤル族自身の自虐的雰囲気」（８頁）と、台湾に対する日本植民主義の根本的反省抜きに、日本人学者に一般化されるいわれはないだろう。

5

著者は以前、「植民地主義の支配そのものを正統化する教条が無意識のまま潜んでいて、しかもその無意識の状況が人間の行動を規制している」状況を訴え（山路 2002: 18）、ポスト・コロニアルという言葉は「宗主国と独立国の双方が依然として植民地主義の呪縛に囚われている現状」を指す（同上：23）と正当にも指摘していた。「存続している」「植民地的状況」（同上：３）からの脱却が脱植民化であるなら、「正名」運動を語る政治的な意味や、植民地統治の評価に関わる点についての記述に、自らの内に潜む植民統治以来の無意識のイデオロギーに敏感になるであろうし、それは植民主義と脱植民化概念のより明確な設定につながっている問題であろう。本書は、植民的近代（colonial modernity）化がまさに進行する中での「旧慣」の文化本質主義的記述の困難さと、書かれる側の人々がそれに異議申し立てをし、主体の復権を主張する中での現代人類学の存在意義の苦境を示した、豊富な議論を呼ぶ著作であると言えよう。最後に、紙幅と能力の関係で、すべての章節への有意義なコメントをなすことが出来なかったことをお詫びしたい。

引用文献

石垣直　2011『現代台湾を生きる原住民：ブヌンの土地と権利回復運動の人類学』東京：風響社
駒込武　2005「『帝国のはざま』から考える」『年報日本現代史10 「帝国」と植民地』現代史料出版、1-21頁
坂野徹　2005『帝国日本と人類学者：1884-1952』東京：勁草書房
清水昭俊　1992「永遠の未開文化と周辺民族」『国立民族学博物館研究報告』17(3): 417-488頁
冨山一郎　2002『暴力の予感：伊波普猷における危機の問題』東京：岩波書店
————2010「歴史経験、あるいは希望について」冨山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験』東京：青弓社、13-58頁
中村平　2003a「台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈」『日本学報』22: 45-67頁
————2003b「マラホーから頭目へ」『日本台湾学会報』5: 65-86頁

————2009「台湾先住民族タイヤルをとりまく重層的脱植民化の課題」『日本学』29: 151-191頁（東国大学日本学研究所）
中村勝　2003『台湾高地先住民の歴史人類学：清朝・日帝初期統治政策の研究』東京：緑蔭書房
————2006『「愛国」と「他者」：台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ』東京：ヨベル
————2009『捕囚：植民国家台湾における主体的自然と社会的権力に関する歴史人類学』東京：ハーベスト社
マーカスとフィッシャー　（Marcus, G. E. & M. M. Fischer）1989［1986］『文化批判としての人類学』、永淵康之訳、東京：紀伊国屋書店
山路勝彦　2002「はしがき」「人類学と植民地主義」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』西宮：関西学院大学出版会、i-ii、3-42頁
太魯閣族正名促進会　2003『還我族名：「太魯閣族」』花蓮：花蓮県秀林郷公所
方玉如　2009「太魯閣族的正名運動與族群認同之研究」台北市立教育大學社會科教育學系碩士論文
林一宏、王惠君　2007「從隘勇線到駐在所：日治時期李崠山地區理蕃設施之變遷」『臺灣史研究』14(1): 71-138頁、臺北：中央研究院臺灣史研究所
郭明正編　2008『賽德克正名運動』花蓮：東華大学原住民民族学院
陳偉智　1998「殖民主義、『蕃情』知識與人類學：日治初期台灣原住民研究的展開（1895-1900）」國立台灣大學歷史學研究所碩士論文
————2009「自然史、人類學與臺灣近代『種族』知識建構：一個全球概念的地方歷史分析」『臺灣史研究』16(4): 1-35頁
鄭安晞　2010「日治時期蕃地隘勇線的推進與變遷（1895-1920）」國立政治大學民族學系博士論文
————2011「日治時期隘勇推進與蕃界之內涵轉變」第三屆「族群、歴史與地域社會」學術研討會、2011年9月24日、臺北：中央研究院臺灣史研究所、1-49頁
Narayan, Uma. 1997. *Dislocating Cultures: Identities, Traditions, and Third World Feminism*. NY & London: Routledge

（なかむら　たいら　神戸女子大学文学部教員）